

Title	『清華大学蔵戦国竹簡〔叁〕』所収文献概要
Author(s)	金城, 未来
Citation	中国研究集刊. 2013, 56, p. 122-145
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58697
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〔特集二〕

『清華大学蔵戦国竹簡〔叁〕』所収文献概要

金城 未来

二〇一二年十二月、『清華大学蔵戦国竹簡〔叁〕』（清

華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編、中西書局。以下、清華簡（三））が刊行された^{〔注〕}。清華簡は、

二〇〇八年に竹簡の整理作業が開始されて以来、二〇一〇年に凶版と釈文とを掲載する第一分冊が、翌二〇一一年には第二分冊が出版されている。本書はその続編にあたり、『説命』（上・中・下）、『周公之琴舞』、『芮良夫恣』、『良臣』、『祝辞』、『赤鬻之集湯之屋』の六種八篇の文献が収録される。

清華簡（三）の「本輯説明」によれば、『説命』は『尚書』関連の文献であり、その他五種は佚書であるという。また佚書中、特に『周公之琴舞』は伴奏付きの舞踏に関わる頌詩、『芮良夫恣』は『毛詩』大雅に関する風刺詩であり、いずれも中国古代の詩や楽について検討

する上で重要な文献であると指摘されている。

本稿では、これら清華簡（三）に所収の六種八篇について速報する。以下、まず、第三分冊全体の形制一覧を掲載し、続いて、整理者の「説明」に従い、各文献ごとにその書誌情報と概要とを示すこととする。

一 清華簡（三）形制一覧

形制一覧（次頁掲載）は、清華簡（三）所収の竹簡カラー凶版、「竹簡信息表」、および各文献の整理者による「説明」をもとに作成した。文献ごとに竹簡数、簡長（完整簡）、編綫、簡端、編号（竹簡番号）の有無、文字数、篇題、備考を記している。

清華簡 (三) 形制一覽

文献名	竹簡数	簡長 (完整簡)	編綫	簡端	番号 (背面)	文字数	篇題	備考
詔命 (上・中・下)	23簡 (現存)	約45cm	三道	平齊	有	642字	【詔命之命】 【各篇の最終簡背面】	・上中下の三篇よりなる。 ・「詔命(下)」の第1簡は、欠失しており見られない。
周公之琴舞	17簡	約45cm	三道	平齊	有	503字	【周公之琴舞】 (第1簡背面上端)	【芮良夫恚】と形制・筆跡が同一。
芮良夫恚	28簡	約45cm	三道	平齊	有	約824字	【周公之頌志】 (第1簡背面)	・簡長について、整理者の趙平安氏は「44.7cm」としているが、本篇中には45cmを僅かに上回る竹簡も存在するため(清華簡(三)「竹簡信息表」)、ここでは約45cmと記した。 ・もともと第1簡背面に記されていた「周公之頌志」には、明らかに削り取られた痕跡が窺える。そのため、現時点においては、本篇の内容により「芮良夫恚」と仮称されている。
良臣	11簡	約32.8cm	両道 (備考参照)	平齊	無	270字		・もととは「祝辞」と同一の書写者によって、一編の竹簡上に連続筆写されていたと考えられている。 ・内容から「良臣」と仮称された。 ・清華簡(三)「竹簡信息表」には、「三道」と記されているが、カラー図版を参照する限り、両道に見える(上部が第一編綫部分から断裂し欠失した可能性も考えられる)。
祝辞	5簡	約32.8cm	両道 (備考参照)	平齊	無	120字		・【良臣】と同一の書写者により、連続筆写された可能性がある。 ・清華簡(三)「竹簡信息表」には、「三道」と記されているが、カラー図版を参照する限り、両道編綫に見える。
赤鱗之集觴之屋	15簡	約45cm	三道	平齊	有	約448字	【赤鱗之集觴之屋】 (第15簡背面下端)	背面上端に劃痕(ひっかき傷状の斜線)が見える。

二 清華簡 (三) 所収文献概要

【凡例】

(1) 書誌情報……各文献の整理者(原釈文担当者)、竹簡数、篇題・編号の有無、竹簡の状態、標号などを掲載する。また、竹簡の形状を各々図示する。

(2) 概要……清華簡(三)の「本輯説明」や、各文献に附された「説明」に基づき、文献内容を概説する。

なお、補足説明および図示を要すると考えられる箇所については、筆者が適宜注を施した。

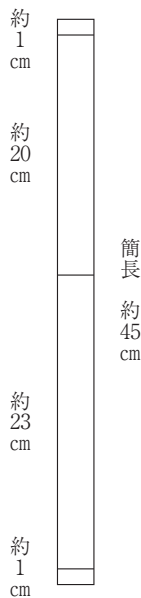
(3) 参考文献……清華簡(三)所収文献については、すでに多数の論文や札記が発表されている。ここでは、二〇一三年三月までに、ネット上で公表された論文・札記類を、参考文献として掲載する。

なお、複数の文献に関連する論文・札記については、重複をいとわず、各文献の「参考文献」欄に、その都度、論文執筆者名、論文名、発表年月日を記載した。

『説命』(上・中・下)(えつめい)

(1) 書誌情報

整理者は李学勤氏。上・中・下の三篇よりなり、同一人物によって書写された可能性が指摘されている。竹簡数は全二十四簡(『説命(上)』全七簡、『説命(中)』全七簡、『説命(下)』全十簡^{注2)})、簡長は約四十五cm、竹簡の背面には編号が記され、上・中・下、各篇の最終簡背面には、それぞれ篇題「傳説之命」が見える^{注3)}。竹簡(完簡)の形状を図示すれば、次のようになる。



(2) 概要

『説命』は『尚書』と密接に関わる文献であると考えられる。『尚書』序には「高宗夢得説、使百工営求諸野、得諸傳巖。作『説命』三篇(高宗夢に説を得、百工をして諸を野に営求せしめ、諸を傳巖^{ふがん}に得たり。『説命』三篇を作る)」とあり、指摘されている篇数が清華簡『説

命』と合致する。

『説命』は、漢代初期の伏生が伝える今文『尚書』中には見えず、孔穎達『尚書正義』が引く鄭玄の説く孔壁古文『尚書』（伏生のものより十六種（巻）二十四篇多い）中にも、見る事ができない。一方、東晋に梅賾が献上した孔安国伝本『尚書』には、三篇の『説命』が含まれているが、これらの文献については、先人がすでに偽書であることを明らかにしている（これらを偽古文『尚書』という）。清華簡『説命』と偽古文『尚書』説命とを対照すれば、偽古文『尚書』説命が、先秦の文献中より選り集められたものを除き、清華簡『説命』と全く異なる内容であることが窺える（注4）。

先秦の文献には、かつてしばしば『説命』が引用されていた。中でも特に注目すべきは、『国語』楚語上（楚の靈王の時世）において、大夫白公子張が述べる内容である。そこには、明確に『説命』という篇名が記されているわけではない。しかし、該当篇には「若葉不瞑眩、厥疾不瘳（若し葉 瞑眩せずんば、厥の疾 瘳えず）」という記述が見え、これは『孟子』滕文公上に「書曰」として引用されている内容と合致する。そのため、ここから『国語』楚語に見える一文が、『尚書』に由来するものであると認めることができる。清華簡『説命』に

は、『国語』楚語と同内容の語句が含まれており、参考になる（注5）。

また『礼記』緇衣は、『説命』の「惟口起羞（惟れ口羞を起し）」云々の記述を引用しており（注6）、これは『墨子』尚同中（注7）や清華簡『説命』にも見られる内容である。しかしこの他、『礼記』文王世子や学記が『説命』を引く箇所（注8）、および『礼記』緇衣が引用する別の『説命』の佚文は（注9）、清華簡『説命』には見えぬ内容である。この情況は、『説命』の伝本に差異があったことによるものと考えられる。

(3) 参考文献

●簡帛網 (<http://www.bsm.org.cn/>)

・王寧「読清華簡叁《説命》散札」(二〇一三年一月八日)

・孫合肥「読《清華大学蔵戦国竹簡(叁)》札記」(二〇一三年一月九日)

・黄傑「読清華簡(叁)《説命》筆記」(二〇一三年一月九日)

・侯乃峰「読清華簡(三)《説命》胙録」(二〇一三年一月十六日)

・楊博「簡述楚系簡帛典籍的史料分類」(二〇一三年一

月十七日)

・楊坤「跋清華竹書《傳説之命》」(二〇一三年二月十日)

・楊坤「再跋清華竹書《傳説之命》」(二〇一三年二月二十六日)

●清華大學出土文獻研究與保護中心 (<http://www.tsinghua.edu.cn/publish/ceptr/6831/index.html>)

・胡敕瑞「読清華簡札記之一」(二〇一三年一月五日)

・楊蒙生「清華簡《説命上》校補」(二〇一三年一月七日)

●清華大學簡帛研究 (<http://www.confucius2000.com/admin/lannu2/jianbo.htm>)

・李銳「読清華簡3札記(一)」(二〇一三年一月四日)

・廖名春「清華簡《傳説之命上》新読」(二〇一三年一月四日)

・廖名春「清華簡《傳説之命中》新読」(二〇一三年一月五日)

・李銳「読清華簡3札記(二)」(二〇一三年一月六日)

・子居「清華簡《説命》上篇解析」(二〇一三年一月六日)

・付強「從賓組卜辭看清華簡《説命》的用詞」(二〇一三年一月七日)

・李銳「読清華簡3札記(三)」(二〇一三年一月十四日)

●復旦網 (<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Default.asp>)

・陳民鎮「清華簡《説命上》首句試解」(二〇一三年一月二十一日)

・羅運環「清華簡「彪」字新考」(二〇一三年二月十七日)

・徐俊剛「釈清華簡《説命中》的「弟」字」(二〇一三年三月二十九日)

『周公之琴舞』(しゅうこうのきんぶ)

(1) 書誌情報

整理者は李守奎氏。竹簡数は全十七簡^{注1}。第十七簡末尾の文字の後に墨鉤が見え、その下は留白となっているため、それが篇末であったことが窺える。竹簡の背面には編号が記され、第一簡の背面上端には、篇題「周公之琴舞」が記述されている。竹簡(完簡)の形状を図示すれば、次のようになる。

簡長 約45cm

約1cm 約21・7cm 約21・3cm 約1cm

本篇は、清華簡(三)所収の『芮良夫愆』と形制・筆跡が同一であると考えられ、内容についても、両篇とも詩に関するものであることから、同時に書写された可能性が指摘されている。

『芮良夫愆』の第一簡背面には、篇題と思われる「周公之頌志(詩)」の文字が見えるが、削り取られた痕跡があり、筆跡は明瞭ではない。また、篇題とその竹簡正面に記された内容とは関連性がなく、書写者あるいは書籍管理者が、『周公之琴舞』の内容によって、両篇を総括し篇題を付け、『芮良夫愆』の背面にその篇題を誤写した可能性が指摘されている。これについて、整理者は、誤写発見後、篇題は削り取られたものの、完全には削除しきれなかったのではないかと述べる。さらに、竹簡の篇題は、もともと(文献を他の書物と区別し)選び取るのに都合がよいために加えられたものであり、篇題に別称があったとしても特に不自然ではない。そのた

め、『周公之琴舞』は「周公之頌志(詩)」と称されている可能性も大きいとしている。

(2) 概要

『周公之琴舞』には、初めに周公の多士(多くの役人)に対する教誡的内容の詩(一部(四句のみ))が配されており、整理者によりそれが一組の頌詩の冒頭部分にあたるものであった可能性が指摘されている。本篇には、続いて成王が作成した訓誡的内容の一組九篇の詩が記述される。その詩の第一篇は、今本『毛詩』周頌の「敬之」にあたるものと考えられ、ここからこれらの詩が、『毛詩』周頌と関連の深い文献であったことが窺える。

周公の頌と、成王が作成した「敬之」を除く八篇の頌とは、今本ではすでに散逸しており伝わらない。

整理者は九篇の詩について、『周公之琴舞』では「九統」と称されているが、「九卒」あるいは「九遂」と読み、意味は『尚書』益稷の孔穎達疏に見える「九成」と同義であろうとしている^(注1)。なお、『尚書』益稷には「簫韶九成(簫韶 九成すれば)」とあり、その孔穎達疏には「鄭云「成猶終也」。每曲一終、必變更奏、故『経』言九成、『伝』言九奏、『周礼』謂之九變、其^み実一也。(鄭云く「成とは猶お終のごときなり」と。每曲一終れ

ば、必ず変じて更に奏するが故に『経』に九成と言ひ、『伝』に九奏と言ひ(注)、『周礼』に之を九変と謂う(注)、其の実は一なり。」とある。

(c) 参考文献

● 簡帛網 (<http://www.bsm.org.cn/>)

- ・黄傑「初読清華簡(三)《周公之琴舞》筆記」(二〇一三年一月五日)
- ・孫合肥「讀《清華大学藏戰国竹簡(叁)》札記」(二〇一三年一月九日)
- ・黄傑「再読清華簡(叁)《周公之琴舞》筆記」(二〇一三年一月十四日)
- ・無語「积《周公之琴舞》中的「彝」字」(二〇一三年一月十六日)
- ・呉雪飛「清華簡(三)《周公之琴舞》補积」(二〇一三年一月十七日)
- ・楊博「簡述楚系簡帛典籍的史料分類」(二〇一三年一月十七日)
- ・蘇建洲「初読清華三《周公之琴舞》・《良臣》札記」(二〇一三年一月十八日)
- 清華大学出土文献研究与保護中心 (<http://www.tsinghua.edu.cn/publish/ceitp/6831/index.html>)

- ・胡敕瑞「讀清華簡札記之二」(二〇一三年一月五日)
- ・胡敕瑞「讀清華簡札記之三」(二〇一三年一月七日)
- ・胡敕瑞「讀清華簡札記之四」(二〇一三年一月七日)
- 清華大学簡帛研究 (<http://www.confucius2000.com/admin/janmu2/jianbo.htm>)

- ・黄甜甜「《周公之琴舞》札記三則」(二〇一三年一月五日)
- ・李銳「讀清華簡3札記(三)」(二〇一三年一月十四日)

- 復旦網 (<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Default.asp>)
- ・羅運環「清華簡「彪」字新考」(二〇一三年二月十七日)

- 簡帛研究 (<http://www.bamboosilk.org/index.asp>)
- ・王連成「關於新出楚簡文獻当中兩個典型表詞字的文字积読問題」(二〇一三年一月二十六日)

- 『芮良夫瑟』(ぜいりょうふび)

- (1) 書誌情報

整理者は趙平安氏。竹簡数は全二十八簡、簡長は約四十五cm(注)。各簡には、おおよそ三十字が筆写されている。第一簡背面には、もともと篇題「周公之頌志」が記

されていたが、明らかにそれらには削り取られた痕跡が窺える。そのため、現時点においては、整理者により、内容に基づき「芮良夫恚」と仮称されている^(注16)。竹簡(完簡)の形状を図示すれば、次のようになる。

簡長 約45cm



約1cm

約21・7cm

約21・3cm

約1cm

本篇には十四の断簡が含まれており、綴合作業を経た後も、依然として七簡が残欠した状態であるが、竹簡の背面には、編号が記されており、配列に問題はない。

(2) 概要

本篇には、古風な表現が使用されている。内容については、まず周の厲王の時の情勢が記され、続いて芮良夫が恚^(注17)(戒めの言葉)を作ったことが記載されている。芮良夫は、当時における悪弊を的確につき、以下、君主が天の常理を畏敬すべきであること、民意を親身になつて考慮すべきこと、恩恵と刑罰とを共に施すべきこと、佞人を用いないこと、また君臣は利を貪り享楽に耽つてはならないこと、謹んで守り行ふべきことなど、種々の

教誠的な言葉を述べている。

芮良夫が厲王を諫め、百官を戒めたという内容は、伝世文献に散見する(例えば『逸周書』芮良夫解・『国語』周語上・『史記』周本紀など)^(注18)。さらに、芮良夫によつて作成されたと伝えられる『毛詩』大雅・桑柔^(注19)もまた、本篇を検討するにあたり参照すべきである。

(3) 参考文献

●簡帛網 (<http://www.bsm.org.cn/>)

- ・黄傑「初読清華簡(叁)《芮良夫恚》筆記」(二〇一三年一月六日)
- ・丁若山「読清華三懸想一則」(二〇一三年一月十二日)
- ・侯乃峰「清華簡(三)所見「倒山形」之字構形臆説」(二〇一三年一月十四日)
- ・楊坤「跋清華竹書所見「也」字」(二〇一三年一月十五日)
- ・黄傑「再読清華簡(叁)《芮良夫恚》筆記」(二〇一三年一月十六日)
- ・楊博「簡述楚系簡帛典籍的史料分類」(二〇一三年一月十七日)
- ・王坤鵬「清華簡《芮良夫恚》篇箋釈」(二〇一三年二月二十六日)

●清華大学出土文献研究与保護中心 (<http://www.tsinghua.edu.cn/publish/ceptrp/6831/index.html>)

・胡敕瑞「読清華簡札記之四」(二〇一三年一月七日)

・馬楠「《芮良夫咎》与文献相類文句分析及補釈」(二〇一三年三月二十五日)

●清華大学簡帛研究 (<http://www.confucius2000.com/admin/jannu2/jianbo.htm>)

・子居「清華簡《芮良夫咎》簡序調整一則」(二〇一三年一月十二日)

・子居「清華簡《芮良夫咎》解析」(二〇一三年二月十四日)

●復旦網 (<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Default.asp>)

・蕭旭「清華簡《芮良夫咎》「富而無況」補証」(二〇一三年三月九日)

●簡帛研究 (<http://www.bamboosilk.org/index.asp>)

・王寧「《清華簡(叁)》的「倒」字臆解」(二〇一三年一月十八日)

・王連成「《清華簡(三)》「丁(釘)」字句解」(二〇一三年二月二十二日)

『良臣』(りょうしん)

(1) 書誌情報

整理者は沈建華氏。竹簡数は全十一簡で、文字の欠失は見られない。簡長は約三十二・八cm。もともと竹簡に篇題は記されていなかった。竹簡(完簡)の形状を図示すれば、次のようになる。

簡長 約32・8cm



約13cm

約13cm

約6・8cm

『良臣』と清華簡(三)所収の『祝辞』とは、もとは同一の書写者によって、一編の連続した竹簡上に記されていた可能性が指摘されている。しかし、両文献の内容は明らかに異なっており、そのため、現時点においては、整理者により、それぞれ「良臣」「祝辞」と仮題されて区別されている^(注20)。

(2) 概要

本篇は連続筆写されており、途中、墨節で分割され、二十の小段に区切られる。「釈文」では、分段して表示

されている。内容は、黄帝から春秋時代までの著名な君主の良臣を記すものであり、おおよそ黄帝より周の成王に至るまでは時代順に、春秋時代の晋の文公から鄭の子産の師・輔に至るまでは国別に配列されている^(注23)。なお、本篇に記載される人物中には、伝世文献に未見のものや、その人物の時代が従来の見解と異なるものもあり、注意を要する。

中国古代には尚賢思想があり、儒家や墨家は、皆この尚賢を主張していた。「墨子」尚賢には、堯が舜を挙用し、禹が益を挙用し、湯が伊尹を挙用し、文王が閎夭・泰顛を挙用したこと等が見え^(注22)、それらの記述はすべて『良臣』の内容と合致している。また、『漢書』古今人表は、多くの人物を九つの等級に分けて並べているが、これも『良臣』と同じく、「尚賢」の思想を反映させたものと考えられる^(注23)。

さらに、本篇の特質として、記された文字の中に、「晋系」の筆写法に属するものが見える点が挙げられる^(注24)。例えば「百」字を「全」字に作るようなものがある(下段「図1」を参照)。

「図1」「百」字(清華簡(三))「字形表」より

	百	百	百	百	百
					
	説命上 ²³	説命下 ²³	説命下 ²³	説命下 ²³	芮良夫 ²³
全					
	芮良夫 ²³	良臣 ²³	良臣 ²³	良臣 ²³	良臣 ²³

また、本篇中には、特に鄭の子産の存在が強調されており、「子産之師」や「子産之輔」にあたる人物が詳述されていることから、本篇の作者を鄭と密接に関わる人物であったとする説も提示されている。

(3) 参考文献

●簡帛網 (<http://www.bsm.org.cn/>)

- ・陳偉「《清華大学藏戰国竹簡・良臣》初説—in《清華大学藏戰国竹簡(三)》成果发布会上」の講話(二〇一三年一月四日)
- ・黄傑「初説清華簡(叁)《良臣》・《祝辭》筆記(二〇一三年一月七日)

・楊博「簡述楚系簡帛典籍的史料分類」(二〇一三年一月十七日)

・蘇建洲「初説清華三《周公之琴舞》・《良臣》札記」

(二〇一三年一月十八日)

・楊坤「清華竹書《良臣》跋」(二〇一三年三月十八日)

●清華大學出土文獻研究與保護中心 (<http://www.tsinghua.edu.cn/publish/ceptr/6831/index.html>)

・楊蒙生「清華簡《良臣》篇性質蠡測」(二〇一三年一月五日)

・周飛「清華簡《良臣》篇劄記」(二〇一三年一月八日)

・孟蓬生「清華簡(三)《良臣》所謂「泰」字試釈」(二〇一三年一月十四日)

・程浩「君陳、君牙臆解」(二〇一三年三月二十五日)

●清華大學簡帛研究 (<http://www.confucius2000.com/admin/janmu2/jianbo.htm>)

・李銳「讀清華簡3札記(一)」(二〇一三年一月四日)

●復旦網 (<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Default.asp>)

・劉剛「清華叁《良臣》為具有晉系文字風格的抄本補証」(二〇一三年一月十七日)

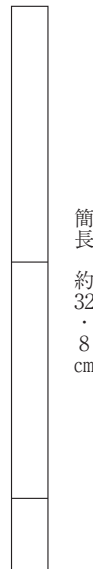
●簡帛研究 (<http://www.bamboosilk.org/index.asp>)

・王連成「關於新出楚簡文獻當中兩個典型表詞字的文字釈読問題」(二〇一三年一月二十六日)

『祝辭』(しゆくじ)

(1) 書誌情報

整理者は李学勤氏。竹簡数は全五簡。もともと清華簡(三)所収の『良臣』と連続筆写されていたと考えられている^(注26)。竹簡(完簡)の形状を图示すれば、次のようになる。



(2) 概要

本篇は、「巫術の類」に属する文献と考えられ、各簡ごとに一則(一条)の祝辞が筆写されている。各簡に見える祝辞の内容は次のとおり。

一条目には「恐溺」、すなわち落水や沈溺を防止する祝辞が記述され、二条目には「救火」の祝辞が記述されている。また残り三条には、全て「射箭(矢を射ること)」に関する祝辞が記載されており、それらはそれぞれ、敵を射ること、禽獸を射ること、革製の甲や盾等を射ることの三種に分類できる。

『礼記』郊特牲^{〔注26〕}の孔穎達疏には「祝、祝也（祝とは、祝なり）」とある。「祝辞」とは、すなわち「祝語（祝い^{まじな}の文句）」であり、難解な文が多いが、本篇はこれらの具体的内容を認識できる貴重な資料であると考えられる。

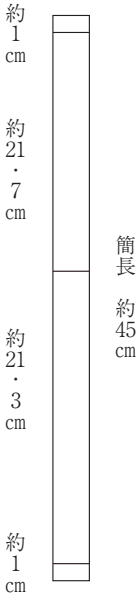
(3) 参考文献

- 簡帛網 (<http://www.bsm.org.cn/>)
- ・ 黄傑「初説清华簡(叁)《良臣》・《祝辞》筆記」(二〇一三年一月七日)

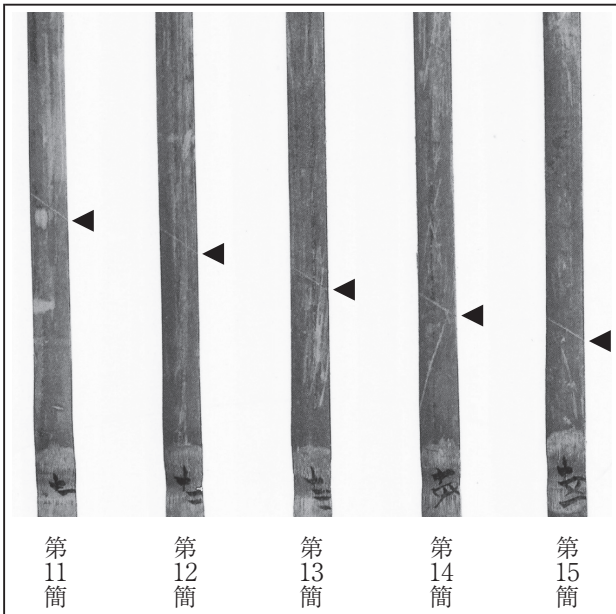
『赤牘之集湯之屋』(せきぎゆうのとうのおくにとどむ)

(1) 書誌情報

整理者は劉国忠氏および邢文氏。竹簡数は全十五簡、三道編綫、簡長は約四十五cm。竹簡の保存状況は比較的良好であるが、第一簡と第二簡の末端が僅かに残欠しており、それぞれ一文字分を損失している。竹簡(完簡)の形状を図示すれば、次のようになる。



竹簡の背面竹節部には、番号が記され、第十五簡の背面下端には、篇題「赤牘之集湯之屋」が見える。また、本篇の竹簡背面上部には、劃痕が確認できる(〔図2〕参照)^{〔注27〕}。



〔図2〕劃痕(『赤牘之集湯之屋』第十一〜十五簡背面上部)

(2) 概要

本篇には、湯が一羽の赤鵠を射、伊尹にそれを煮て羹を作らせ、さらにこの行為により引き起こされた種々の出来事が記載されている。この内容は、『楚辞』天問に見える「縁鵠飾玉、后帝是饗（鵠を縁り玉を飾りて、后帝是れ饗けたり）」^{〔註28〕}と関連するものと指摘されている。

伊尹は湯の臣下であり、湯は伊尹を厨房の中から挙用した。この話は、古くから流布する故事である。先秦代より漢代に至るまで、多数の伊尹に関する故事が流行していたと考えられ、その内容は諸子の書にも数多く見られる^{〔註29〕}。『漢書』藝文志・諸子略（小説家）には、伊尹故事に関する文献と思われる『伊尹説』二十七篇の記載が見られるが、その書はすでに亡佚している。

本篇において最も注目すべき特質は、強烈な巫術的性格が窺える点である。例えば、本篇では湯が伊尹に呪詛をかけ、彼を「視而不能言（視れども言うこと能わず）」という状態に陥らせる。また、その直後には、伊尹が「巫鳥」と称される鳥に救われ、その際、天帝の命令（「二黄蛇與二白兔居后之寢室之棟（二黄蛇と二白兔とを后の寢室の棟に居）」らしむる命令）によって「夏后（桀）」が重病を患っていることを知る。その後、夏后の

病の原因を理解したことで、伊尹は夏后の危難を救うことができたとされているのである。

本篇の内容について、整理者は、楚人が巫鬼（などの巫術）的習俗を深く信じていたことと関連するものであり、楚地に伝播した伊尹故事の一つであろうと述べている。

(3) 参考文献

● 簡帛網 (<http://www.bsm.org.cn/>)

・ 孟蓬生「清華簡(三)「屋」字補釈」(二〇一三年一月六日)

・ 侯乃峰「《赤鵠之集湯之屋》的「赤鵠」或当是「赤鳩」(二〇一三年一月八日)

・ 梁月娥「説《清華(叁)》〈赤鵠之集湯之屋〉之「洵」(二〇一三年一月八日)

・ 黄傑「初説清華簡(叁)《赤鵠之集湯之屋》筆記」(二〇一三年一月十日)

・ 丁若山「説清華三懸想一則」(二〇一三年一月十二日)

・ 侯乃峰「清華簡(三)所見「倒山形」之字構形臆説」(二〇一三年一月十四日)

・ 楊坤「跋清華竹書所見「也」字」(二〇一三年一月十五日)

- ・王寧「読清華簡三《赤鵠之集湯之屋》散札」(二〇一三年一月十六日)
- ・呉雪飛「也談清華簡(三)《赤鵠之集湯之屋》之「洧」」(二〇一三年一月十六日)
- ・楊博「簡述楚系簡帛典籍的史料分類」(二〇一三年一月十七日)
- ・肖芸曉「試論清華竹書伊尹三篇的關聯」(二〇一三年三月七日)
- 清華大學出土文獻研究與保護中心 (<http://www.tsinghua.edu.cn/publish/ceitp/6831/index.html>)
- ・劉樂賢「釈《赤鵠之集湯之屋》的「塚」字」(二〇一三年一月五日)
- 復旦網 (<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Default.asp>)
- ・蘇建洲「釈《赤鵠之集湯之屋》的「曩」字」(二〇一三年一月十六日)
- ・王寧「楚簡中的「靈」与「天靈」補説」(二〇一三年一月二十七日)
- 簡帛研究 (<http://www.bamboosilk.org/index.asp>)
- ・王寧「《清華簡(叁)》的「倒」字臆解」(二〇一三年一月十八日)
- ・王連成「《清華簡(三)》「丁(釘)」字句解」(二〇一三年二月二十二日)

注

- (1) 清華簡(三)は、上下二冊よりなる。上冊には、凡例、第三分冊の説明、目次、原寸大カラー図版(正面・背面)、約二倍の拡大図版(正面の拡大図版、および背面に見える文字周辺部の拡大図版)が収められており、拡大図版の各簡左横には、該当簡の釈文が示されている。また、「周公之琴舞」「芮良夫毖」に見える不鮮明な文字については、一部、赤外線拡大図版が掲載されている。下冊には、清華簡(三)所収六文獻の釈文と注釈、字形表(漢語拼音索引、筆画索引付)、各簡ごとに竹簡情報(「篇序」「篇名」「整理序号」「入蔵番号」「長度(cm)」「簡背原有番号」「編痕状況」「備注」など)を記した表(「竹簡信息表」)が収録されている。
 - (2) ただし、整理者は「説命(下)」について、第一簡が欠失しており、九簡のみが現存していると述べる。
 - (3) 竹簡には、もともと篇題「傳説之命」が記述されていたが、整理者は便宜上、本文献を内容順に、「説命上」「説命中」「説命下」と仮称するとしている。
- 一方、篇題について李銳「読清華簡3札記(二)」は、「清華大學藏戰国竹簡(壹)」の『尚書』関連文獻(周武王有疾周公所自以代王之志(金縢))同様、原題を重んじ、本文献

を『傳説之命(説命)』と称すべきであるとしている。さらに、同氏は『説命』の成立や伝世の問題を考慮し、三篇を上・中・下ではなく、『傳説之命(説命)』甲・乙・丙、あるいは『傳説之命(説命)』一・二・三と表記すべきであろうと述べる。

(4) 清華簡『説命』の内容について、整理者は「説明」中、ほとんど解説を加えていない。そのため、原釈文に従って解釈した清華簡『説命』各篇の概要を次に示しておく。

・『説命(上)』……殷王(武丁)が失仲の使人である傳説を天より賜る宣託を受けたため、その居処を探し求めさせたところ、傳巖で労役についていることが明らかとなった。そこで、王は傳説に対し、帝(天)命(天が傳説を武丁に与えると命じたこと)について告げると、説もそれに応える発言をした。その後、傳説は失仲を伐ち、自ら進んで殷に赴き、王に用いられて公となったという内容。

↓偽古文『尚書』説命上に、「失仲」(現時点において未詳)は登場しない。

↓清華簡『説命』には、偽古文『尚書』説命には見えない「説命(中)」……傳説が殷に至った後、武丁が傳説に対し、政治をしつかりと支えるよう呼びかける内容が記されている。

↓本篇には、偽古文『尚書』説命上および説命中と類似する。

る文句が見える。

↓清華簡『説命(上)』および『説命(下)』では、武丁が「殷王」「王」と呼称されているのに対し、本篇には「武丁」と名が明記されている箇所がある。

・『説命(下)』……王(武丁)が様々な訓辞や「大戊」の故事などを引き、中篇同様、傳説に対して政治を支えるよう呼びかける内容が見える。

↓本篇には、偽古文『尚書』説命と類似する表現は見られない。

↓偽古文『尚書』説命下の内容は、王と傳説の会話が構成されているが、本篇には王の言葉のみが記されている(ただし、李銳「說清華簡3札記(一)」は、清華簡『説命(下)』の一部を傳説の言としている)。

↓偽古文『尚書』説命下では、武丁が傳説に対し、伊尹のエピソードを用いて説いているのに対し、本篇では大戊の故事を用いて呼びかけている。

なお、偽古文『尚書』説命と清華簡『説命』とを比較しやすいよう対照表を作成した。本稿末「表1」を参照。

(5) 偽古文『尚書』説命上にも「若薬弗瞑眩、厥疾弗瘳。(若し薬瞑眩せずんば、厥の疾瘳えず)」とある。

(6) 『礼記』緇衣には次のように記されている。

兂命曰、惟口起羞、惟甲冑起兵。惟衣裳在笥。惟干戈省

厥躬。(兌命に曰く、惟れ口羞を起し、惟れ甲冑兵を起す。惟れ衣裳筭に在り。惟れ干戈厥の躬を省みると。)

また、偽古文『尚書』説命中にも、「惟口起羞、惟甲冑起戎。惟衣裳在筭、惟干戈省厥躬。(惟れ口羞を起し、惟れ甲冑戎を起す。惟れ衣裳筭に在り、惟れ干戈厥の躬を省みると。)」とある。

(7) 是以先王之『書』術令之道(注)。曰「唯口出好興戎。則此言善用口者出好、不善用口者以為讒賊寇戎。則此豈口不善哉、用口則不善也、故遂以為讒賊寇戎。(是を以て先王の『書』術令の道に曰く「唯れ口好を出し戎を興す」と。則ち此れ善く口を用いる者は好を出し、善く口を用いざる者は以て讒賊寇戎を為すを言う。則ち此れ豈に口善からざらんや、口を用いること則ち善からざるなり、故に遂に以て讒賊寇戎を為す。)

〔墨子〕尚同中)

(8) 「術令」について、孫詒讓『墨子問詁』には、次のように記されている。

「術令」、当是「説命」之段字。(中略)案此文与彼引「兌命」(筆者注・『礼記』緇衣に引用されている「兌(説)命」辞義相類、「術」「説」・「令」「命」音並相近、必一書也。

また「之道」について、畢沅は「道之」とすべきであろう」といい、孫詒讓は畢沅の説を否定し、「下文二箇所に見える「之道」は、恐らくは語順が逆になっているわけではない」と述

べる。また、呉毓江は「之道」は、「之言」の意であろう」としている。

(9) ①兌命曰「念終始典於学」。(兌命に曰く「終始を念いて学に典にす」と。)(『礼記』文王世子)

②兌命曰「念終始典于学」。(兌命に曰く「終始を念いて学に典にす」と。)(『礼記』学記)

③兌命曰「学学半」。(兌命に曰く「学まなぶのは学まなぶの半なり」と。)(学記)

以上の内容と類似する記述は、偽古文『尚書』説命下にも「惟教(教)学半、念終始典于学、厥徳脩罔覚(惟れ教(教)うるは学ぶの半なり、終始を念いて学に典にすれば、厥の徳脩まりて覚ゆる罔し)」とある。

④兌命曰「敬孫務時敏、厥修乃来」。(兌命に曰く「敬しみ孫しんがいて務めて時に敏なれば、厥の修まること乃ち来る」と。)(『礼記』学記)

以上の内容と類似する記述は、偽古文『尚書』説命下にも「惟学遜志、務時敏、厥脩乃来(惟れ学びて志を遜ゆすり、務めて時に敏なれば、厥の脩まること乃ち来る)」とある。

(10) 兌命曰「爵無及悪徳、民立而正事。純而祭祀、是為不敬。事煩則乱、事神則難」。(兌命に曰く「爵悪徳に及ぼすこと無かれ、民立てて正事とせん。純ことごとくして祭祀せば、是を不敬と為す。事煩わしければ則ち乱れ、神に事うれば則ち難し」と。)

〔「礼記」緇衣〕

以上の内容と類似する記述は、偽古文『尚書』説命中にも「爵罔及惡徳、惟其賢。(爵、惡徳に及ばずこと)罔く、惟れ其れ賢をす」〔鬯于祭祀、時謂弗欽。礼煩則乱、事神則難。(祭祀に鬯るる、時れ欽まずと謂う。礼煩わしければ則ち乱れ、神に事うるは則ち難し)〕とある。

(11) 整理者によれば、第十五簡が半分ほど欠失していることを除けば、その他の竹簡の保存状態は良好であるという。

(12) 清華簡(三)『周公之琴舞』語注二には、「九統」について次のようにある。

簡文中読為「卒」或「遂」。『爾雅』釋詁「卒、終也」。「九統」義同「九終」「九奏」等、指行礼奏樂九曲。『逸周書』世俘「籥人九終」、朱右曾『逸周書集訓校釋』「九終、九成也」。

(13) 備樂九奏而致鳳皇、則余鳥獸不待九而率舞。(備樂九奏して鳳皇を致せば、則ち余鳥獸九たびを待たずして率い舞う。)

〔「尚書」益稷・偽孔伝〕

(14) 凡樂黃鍾為宮、大呂為角、大蕤為徵、應鍾為羽、路鼓・路鼗、陰竹之管、龍門之琴瑟、九德之歌、九磬之舞、於宗廟之中奏之。若樂九變則人鬼可得而礼矣。(凡そ樂は黃鍾を宮と為し、大呂を角と為し、大蕤を徵と為し、應鍾を羽と為し、路鼓・路鼗、陰竹の管、龍門の琴瑟、九德の歌、九磬の舞、宗廟の中に於

いて之を奏す。若し樂九変すれば則ち人鬼得て礼す可し。)

〔「周礼」春官・宗伯下・大司樂〕

(15) 簡長について、整理者の趙平安氏は「四十四・七cm」としているが、「竹簡信息表」によれば、本篇中には、四十五cmを僅かに上回る長さの竹簡も存在していることが分かる。

(16) 竹簡形制の詳細については、『周公之琴舞』の「書誌情報」参照。

(17) 整理者は、清華簡(三)『芮良夫愆』語注六において、王念孫『爾雅疏証』の「愆」「皆戒勸之意也」を引用しつつ説明している。また、「愆」は動詞にも名詞にもなり得るが、本篇では「愆」が名詞として使用されていると述べている。

(18) この他、『春秋左氏伝』文公元年、『潜夫論』にも芮良夫の故事が見える。

(19) 『毛詩』大雅・桑柔の「詩序」には「桑柔 芮伯刺厲王也(桑柔は、芮伯 厲王を刺るなり)」とあり、朱熹『詩集伝』には「旧説、此為芮伯刺厲王而作。春秋伝亦曰芮良夫之詩。則其説是也(旧説に、此れ芮伯 厲王を刺りて作ると為す。春秋伝にも亦曰く、芮良夫の詩なりと。則ち其の説是なり)」とある。

(20) 本篇の仮題「良臣」について、整理者はその内容から、試みに「良臣」としたと述べている。

(21) 整理者は、最後に見える楚の共王の一条が、後に補われた可能性を指摘している。

(22) 故古者聖王之為政、列德而尚賢。雖在農与工肆之人、有能

則舉之、高予之爵、重予之祿、任之以事、斷予之令。(中略) 有能則舉之、無能則下之、公公義、辟私怨、此若言之謂也。

故古者堯舜於服沢之陽、授之政、天下平。禹益於陰方之中、

授之政、九州成。湯拳伊尹於庖厨之中、授之政、其謀得。文

王拳閔天泰顛於冒罔之中、授之政、西土服。(故に古者 聖王

の政を為すや、徳を列ねて賢を尚ぶ。農と工肆とに在るの人

と雖も、能有れば則ち之を挙げ、高く之に爵を予え、重く之

に祿を予え、之に任ずるに事を以てし、断ずるに之に令を予う。

(中略) 能有れば則ち之を挙げ、能無ければ則ち之を下げ、公

義を挙げて、私怨を辟く、此若の言の謂なり。故に古者堯は

舜を服沢の陽より挙げ、之に政を授けて、天下平らかなり。

禹は益を陰方の中より挙げ、之に政を授けて、九州成れり。

湯は伊尹を庖厨の中より挙げ、之に政を授けて、其の謀得たり。

文王は閔天・泰顛を冒罔の中より挙げ、之に政を授けて、西

土服せり。(『墨子』尚賢上)

是故昔者堯有舜、舜有禹、禹有皋陶、湯有小臣、武王有閔天・

泰顛・南宮括・散宜生。而天下和、庶民阜。是以近者安之、

遠者帰之。(中略) 尚賢者、天鬼百姓之利、而政事之本也。(是

の故に昔者堯に舜有り、舜に禹有り、禹に皋陶有り、湯に小

臣有り、武王に閔天・泰顛・南宮括・散宜生有り。而して天

下和らぎ、庶民阜なり。是を以て近き者は之を安んじ、遠き

者は之を帰す。(中略) 賢を尚ぶは、天鬼百姓の利にして、政

事の本なり。(『墨子』尚賢下)

(23) 本篇に登場し、かつ『漢書』古今人表にも名が見える人物

について、整理者は、語注で極力説明を加えるが、読者が梁

玉繩『古今人表考』(『史記漢書諸表訂補十種』、中華書局、一

九八二年所収)を参照できる場合には、注において重ねて詳

述することはしないとしている。

なお、清華簡『良臣』には、『漢書』古今人表において、あ

まり高い評価が与えられていない人物についても、名が列記

されている。例えば、古今人表では、上上(聖人)、上中(仁

人)、上下(智人)、中上……下下(愚人)と人物を九段階に

分けて評価しているが、そのうちの「中下」に位置づけられ

ている人物が、本篇には見える(楚の昭王の臣下司馬子期や、

魯の哀公の臣下季康子など)。さらに、魯の哀公の臣下として、

大夫季康子とともに、孔丘(孔子)の名が並記されているこ

とは注目される。この記述より、清華簡『良臣』の書写され

た時期には、すでに孔子が魯を代表する人物として認識され

ていたことが窺われるであろう。

(24) 戦国時代には、斉系・燕系・晋系など、様々な系列の特徴

的な文字が見られた。詳しくは、王寧主編・趙学清著『戦国

東方五国文字 構形系統研究』(上海教育出版社、二〇〇五年

十月)、湯余恵主編『戦国文字編』(福建人民出版社、二〇〇

一年十二月) 参照。

(25) 竹簡形制の詳細については、『良臣』の「書誌情報」参照。

(26) 詔祝於室、坐戸於堂、用牲於庭、升首於室。(室に詔祝し、戸を堂に坐し、牲を庭に用い、首を室に^あ升ぐ。)(『礼記』郊特牲)

(27) 「劃痕」については、二〇〇九年、孫浦陽氏が北京大学蔵漢簡の背面に、ひっかき傷状の斜線を発見して以来、注目されるようになった。詳しくは、中国出土文献研究会「中国新出簡牘學術調査報告—上海・武漢・長沙—」(大阪大学中国学会『中国研究集刊』第五十五号、二〇一二年十二月) 参照。

(28) 『楚辞』天問には次のようにある。

緑鵠飾玉、后帝是饗

何承謀夏桀、終以滅喪

帝乃降觀、下逢伊摯

何條放致罰、而黎服大說

(鵠を縁り玉を飾りて、后帝是れ饗けたり)

何ぞ謀を承けたる夏桀、終に以て滅喪せる

帝乃ち降り観て、下伊摯に逢う

何ぞ條に放ち罰を致して、黎服大いに説べる)

(29) 伊尹の故事は、『墨子』尚賢上・尚賢中・尚賢下、『孟子』万章上、『莊子』庚桑楚、『韓非子』難言、『呂氏春秋』具備(審応覽)・求人(慎行論)・本味(孝行覽)、『淮南子』汜論訓・

脩務訓、『楚辞』天問の王逸注、『論衡』吉驗、『水経注』伊水などに見える。

なお現時点において、『清華大学蔵戦国竹簡』として刊行され、积文および図版を目にすることができる文献中、伊尹が登場する文献は四篇(尹至『尹誥』、『良臣』、『赤鱗之集湯之屋』)含まれているが、各文献に記載された伊尹の呼称は、それぞれ異なっている(尹至では「尹」、尹誥では「尹」「摯」、『良臣』では「伊尹」、『赤鱗之集湯之屋』では「小臣」)。

〔附記1〕本稿を作成するにあたり、二〇一三年三月十九日に行われた中国出土文献研究会において、参加者各位より貴重なご意見を賜った。厚く御礼申し上げます。

〔附記2〕本稿は、平成二十四年度日本學術振興会・科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

〔表1〕 偽古文『尚書』説命と清華簡『説命』との対照表

〔凡例〕

- (1) 清華簡『説命』の本文は、便宜上、整理者の定めた原釈文に従った。
- (2) 対照表は三段に分けて作成した。上段には偽古文『尚書』説命を、中段には清華簡『説命』を、下段には上記二つの「説命」と対応すると考えられる伝世文献の記述を掲載している。また、偽古文『尚書』説命および清華簡『説命』については、上篇・中篇・下篇の三篇に区切り表示している。
- (3) 文意が対応すると考えられる箇所には、それぞれ傍線や波線などの記号を附した。なお、清華簡『説命』の概要および特記事項については、注(4)参照。

偽古文『尚書』説命	清華簡『説命』	伝世文献の対応箇所
<p>上篇 王宅憂亮、陰三祀。既免喪、其惟弗言。 群臣咸諫于王、曰「嗚呼。知之曰明哲、明哲実作則。天子惟君万邦、百官承式」。</p> <p>王言惟作命、不言、臣下罔攸稟命。王庸作書以誥曰「以台正于四方、惟恐德弗類、茲故弗言。泰默思道、夢帝賚予良弼、其代予言」。</p> <p>乃審厥象、俾以形旁求于天下。</p>	<p>上篇 惟殷王賜説于天、庸爲失仲使人。王命厥百工向、以貨徇求説于邑人。惟弼人得説于傳巖、厥俾繡弓、引關辟矢。説方築城、滕降庸力、厥説之狀、腕肩如椎。</p> <p>王廼訊説曰「帝抑尔以畀余、抑非」。説廼曰「惟帝以余畀尔、尔左執朕袂、尔右稽首」。</p> <p>王曰「宣然。天廼命説伐失仲」。失仲是生子、生二牡豝。</p> <p>失仲卜曰「我其殺之」、「我其已」、</p>	<p>如是而又使以象夢旁求四方之賢、得傳説以來、升以爲公、而使朝夕規諫。</p> <p>(『国語』楚語上)</p> <p>武丁夜夢得聖人、名曰説。以夢所見視群臣百吏、皆非也。於是乃使百工嘗求之野、得説於傳險中。是時説爲胥靡、筑於傳險。見於武丁、武丁曰是也。得而与之語、果聖人、举以爲相、殷国大治。(『史記』股本紀)</p> <p>子張曰「書」云「高宗諒陰、三年不言」、何謂也。子曰「何必高宗。</p>

勿殺」。勿殺是吉。失仲違卜、乃殺一豕。說于圍伐失仲、一豕乃旋保以逝、廼踐、邑人皆從、一豕隨仲之自行、是爲赦俘之戎。

說築傅巖之野、惟肖。爰立作相、王置諸其左右。

其惟說邑、在北海之州、是惟圜土。說來、自從事于殷、王用命說爲公。

古之人皆然。君薨、百官總己以聽於冢宰三年」。(《論語》憲問)

其在高宗、時旧勞于外、爰暨小人。作其即位、乃或亮陰、三年不言。其惟不言、言乃雍。(《尚書》無逸)

『書』曰「高宗諒闇、三年不言」。

(《禮記》喪服四制)

高宗云「三年其惟不言、言乃謹」。

(《禮記》坊記)

子張問曰「『書』云「高宗三年不言、言乃謹」。(《禮記》檀弓下)

高宗、天子也、即位諒闇、三年不言。卿大夫恐懼、患之。高宗乃言曰「以余一人正四方、余唯恐言之不類也、茲故不言」。(《呂氏春秋》審心覽·重言)

其在高宗、久勞于外、為与小人、作其即位、乃有亮闇、三年不言、言乃謹。(《史記》魯世家)

傳說被褐帶索、庸築乎傅巖、武丁得之、舉以為三公、与接天下之政、治

中篇

命之曰「朝夕納誨，以輔台德。若金、用汝作礪。若濟巨川，用汝作舟楫。若歲大旱，用汝作霖雨。啓乃心，沃朕心。若藥弗瞑眩，厥疾弗瘳。若跣弗視地，厥足用傷。惟暨乃僚，罔不同心，以匡乃辟。俾率先王，迪我高后，以康兆民。嗚呼，欽予時命，其惟有終。」

說復于王曰「惟木從繩則正，后從諫則聖。后克聖，臣不命其承，疇敢不祇若王之休命」。

惟說命總百官，乃進于王曰「嗚呼，明王奉若天道，建邦設都，樹后王君公，承以大夫師長，不惟逸子，惟以亂民。惟天聰明，惟聖時憲，惟臣欽若，惟民從乂。」**惟口起羞**。

中篇

說來自傅巖、在殷。武丁朝于門，入在宗。

王原比厥夢，曰「汝來惟帝命」。說曰「允若時」。

武丁曰「來格汝說，聽戒朕言，漸之于乃心。若金、用惟汝作礪。古我先王滅夏，變強、捷蠢邦、惟庶相之力勝、用孚自邇。敬之哉、啓乃心、日沃朕心。若藥、如不瞑眩、越疾罔瘳。朕畜汝、惟乃腹、非乃身。若天旱、汝作淫雨。若津水、汝作舟。汝惟茲說底之于乃心。且天出不祥、不徂遠、在厥落、汝克覩視四方、乃俯視地。心毀惟備。敬之哉、用惟多德。

且惟口起戎出好、惟干戈作疾、惟衣載病、惟干戈省厥躬。若抵不視、用傷、吉不吉。余告汝若時、志之

天下之民。（墨子）尚賢中）

傅說之狀、身如植蟻。（荀子）非相）

昔者傅說居北海之洲、圜土之上、衣褐帶索、庸築於傅巖之城、武丁得而舉之、立為三公、使之接天下之政、而治天下之民。（墨子）尚賢下）

傅說拳於版築之間。（孟子）告子下）

若金、用女作礪。若津水、用女作舟。若天旱、用女作霖雨。啓乃心、沃朕心。若藥不瞑眩、厥疾不瘳。若跣不視地、厥足用傷。（國語）楚語上）

若藥不瞑眩、厥疾不瘳。（孟子）滕文公上）

惟口起羞、惟甲冑起兵。惟衣裳在筓。惟干戈省厥躬。（禮記）緇衣）

唯口出好與戎（墨子）尚同中）

下篇	
<p>王曰「來，汝說。台小子旧學于甘盤，既乃遜于荒野，入宅于河。自河徂亳，暨厥終罔顯。爾惟訓于朕志。若作酒醴、爾惟麴糵。若作和羹、爾惟塩梅。爾交修予，罔予棄，予惟克邁乃訓」。</p>	<p>惟甲冑起戎、惟衣裳在笥、惟干戈省厥躬。王惟戒茲、允茲克明、乃罔不休。惟治乱在庶官。官不及私昵、惟其能。爵罔及惡德、惟其賢。慮善以動、動惟厥時。有其善、喪厥善。矜其能、喪厥功。惟事、無恥過作非。惟厥攸居、政事惟醇。黷于祭祀、時謂弗欽。礼煩則乱、事神則難。</p> <p>王曰「旨哉、說。乃言惟服。乃不良于言、予罔聞于行」。</p> <p>說拜稽首曰「非知之艱、行之惟艱。王忱不艱、允協于先王成德、惟說不言有厥咎」。</p>
下篇	
<p>……員、經德配天、余罔有讟言。小臣罔俊在朕服、余惟命汝說融朕命、余柔遠能邇、以益視事、弼永延、作余一人」。</p> <p>王曰「說、既亦詣乃服、勿易倖越。如飛雀罔畏離、不惟鷹隼、迺弗虞</p>	<p>于乃心」。</p>
	<p>免命曰「爵無及惡德、民立而正事。純而祭祀、是為不敬。事煩則乱、事神則難。」（『礼記』 緇衣）</p> <p>書曰「居安思危」。思則有備、有備無患。（『左伝』 襄公十一年）</p>

<p>說曰「王、人求多聞、時惟建事。學于古訓、乃有獲。事不師古、以克永世匪說攸聞。」 <small>〔惟學遜志〕</small> 務時敏。厥修乃來。允懷于茲、道積于厥躬。 <small>〔惟教〕</small> 教。學半、念終始典于學、厥德修罔覺。 <small>〔監于先王成憲〕</small> 其永無愆。惟說式克欽承、旁招俊乂、列于庶位」。</p> <p>王曰「嗚呼、說、四海之內、咸仰朕德、時乃風。股肱惟人、良臣惟聖。昔先正保衡、作我先王、乃曰『予弗克俾厥后惟堯·舜、其心愧恥、若撻于市』。一夫不獲、則曰『時予之辜』。佑我烈祖、格于皇天。爾尚明保予、罔俾阿衡、專美有商。惟后非賢不乂、惟賢非后不食。其爾克紹乃辟于先王、永綏民」。</p> <p>說拜稽首曰「敢對揚天子之休命」。</p>	<p>民、厥其禍亦羅于<small>〔鞫〕</small>察」。</p> <p>王曰「說、汝毋忘曰『余克享于朕辟』。其又迺司四方民不克明、汝惟有萬壽在乃政。汝亦惟克顯天、惇<small>〔察〕</small>小民、中乃罰、汝亦惟有萬福業業在乃服」。</p> <p>王曰「說、昼如視日、夜如視辰、時罔非乃載。敬之哉。若賈、汝母非貨如璣石」。</p> <p>王曰「說、余既諷劓愆汝、使若玉冰、上下罔不我儀」。</p> <p>王曰「說、昔在大戊、克漸五祀、天章之用九德、弗易百姓。惟時大戊謙曰『余不克辟萬民。余罔墜天休、式惟三德賜我、吾乃敷之于百姓。余惟弗雍天之嘏命』」。</p> <p>王曰「說、母獨乃心、敷之于朕政、欲汝其有友勸朕命哉」。</p>	<p><small>〔兌命〕</small>曰「敬孫務時敏、厥修乃來。」 <small>〔禮記〕</small> 學記</p> <p><small>〔兌命〕</small>曰「念終始典於學。」 <small>〔禮記〕</small> 文王世子</p> <p><small>〔兌命〕</small>曰「念終始典于學。」 <small>〔禮記〕</small> 學記</p> <p><small>〔兌命〕</small>曰「學學半」。 <small>〔禮記〕</small> 學記</p> <p>昼之在視日、夜之在視辰。 <small>〔清華簡〕</small> 周公之琴舞</p>
--	--	--